

惑星ソラリスに向き合っているか

寮務主事補 関口明生

今年度の途中から国際寮担当の寮務主事補になりました、制御のほうの関口です。国際寮は令和4年の4月から本格的に始まる予定で、近くの大同特殊鋼団地跡における住宅の建設ラッシュとは対照的に長い期間をかけて、丹精込めて造られています。国際寮の設立は五十年以上の木更津高専の歴史上、初めてです。いろいろな課題が出てこないはずはありません。国際寮に関わる学生の皆さんと一緒に考えながら、どれだけ優れた制御システムであっても時刻 $t=0$ におけるステップ応答の偏差は100%であることも思い浮かべながら、できることを着実に進めていければと考えています。

少しずつでき上がる国際寮を見て心配な変化の一つは、寮と図書館の間の歩道がなくなったことです。木更津高専の図書館は立地や配架がいまいちです。ですが、博士や修士の学位を持った先生方が推薦された様々な本が半世紀にわたって入ってきたこともあって、よい本がたくさんあります。関口が学生であったころからも、自慢の図書館です。もしもあまり利用していないようならMOTTAINAIです。ぜひ足を運んで、気になった本を借りてください。本には、わざわざ書き残すほどの著者の悩みや繊細な感性が表れています。助けが欲しいときに勝手に歩いて来てはくれませんが、困った時や落ち込んだときに寄り添ったりヒントを与えてくれたりする本も多くあります。

「ソラリスの陽のもとに」というSF小説は、人間と人間以外との相互作用を考えさせてくれます。おすすめの一冊です。この本には、ソラリスという地球外惑星に、サイバネティクス学者（工学者）と物理学者と、心理学者の主人公と、「客」という得体のしれない対象が登場します。複雑な課題の表れとしての「客」との接触を通して、主人公は、自分自身における認知の枠組みの狭さを少しずつ反省します。SFの2文字が表すようにフィクションですが、著者スタニワフ・レムの観察眼や構想力には驚きです。

一方、現実の身の回りには、地球環境の破壊と持続可能性の課題、人類の有史以来絶えない人権や貧困や差別の課題、比較的小さいであろうCOVID-19の課題など、それこそ「惑星規模」というべき課題があります。戦争はもちろんGDP競争どころでもありません。関口を含めた今までの平均的な大人たちはおそらく、どちらかという、興味がない、私の課題ではない、考えないし学ばない、何も対策しない、我が亡き後に洪水よ来たれ、といった態度で、これらの課題をさらに巨大にしてきました。ソラリスは地球の比喻であって、完全にフィクションではないのかもしれませんが。現実の複雑さに向き合わず「客」と自分とを切り離していないか。関口は反省しなければなりません。そんな気持ちから学び考え、小さいけれど新しい研究をひとつ始めました。

宇宙船地球号の乗組員として、あなたは、どう考えられますか。どうされますか。